

## 復活の木曜日の説教

金 大烈 神父 2010年4月8日(木)

### 《復活の体験は、平和》

今日の第一朗読(使徒言行録)と福音(ルカ 24・35-48)は、つながっています。順番は、福音の出来事の後、第一朗読の物語が起こりました。

第一朗読で私たちが考えるべきことは、ただ一つです。私たちがよく間違えるところをイエス様ははっきり見せてくださっているのです。ふつう人間は、よい結果が出たり、よい評判が立ったりすると、それを自分の手柄にしたがります。しかしペトロの場合を考えてみてください。今日の福音では、歩けない人を歩けるようにしましたね。そして、“それを見た人々は、使徒ペトロの力で歩けるようになったかのように見つめた”と第一朗読で話されています。その時ペトロは、「私の力によってこのようになったのではありません。これは、あなたたちが殺してしまったイエスの恵みによってできたのです。」とはっきり話しましたね。

聖霊に導かれて働く人と、自分の良心や頭、望みによって働く人との差がここに表れます。どちらの場合も、自分の考え方、自分がもらったタレントによって善いことをするのは同じです。しかし、その栄光を神様に置くのか、自分に置くのかによって、全く違ってきます。もし善い結果、善い評判が得られたら、私たちはまず全ての善いことを神様に戻すべきです。そして、素直に感謝すべきです。それがなければ、人間の力による行いとして、神様の導きによる行いとは区別されます。私たちは、どんなときにも、善いことならば“神様によってこのようになった”と思う素直できれいな心を持たなければなりません。第一朗読の話を通してその点について考えて見ましょう。

さあ、福音に入ってみましょうか。福音では、一つだけ思い出しましょう。それは、「復活の体験の結果は、平和である」ということです。口では、「私は復活を体験しました」と言いながら、いつも不安に陥って、不安な顔を見せていたら、その人は復活の体験からはまだまだ遠いのです。復活の意味も全く分からないのです。復活の体験は平和です。だから、イエス様が復活されて初めて私たちにおっしゃったメッセージは、「あなたがたに平和があるように」でした。ある意味では、『平和を求めること』が、私たちの信仰の目的かもしれません。ですから私たちは、何があっても、どんな状況に陥っても、誰からも「この人は大変だ」と言われるような状況に陥っても、平和を求めなければなりません。たくさんのお金を手に握っていても、不安ばかりの生活だったら、その人は不幸です。何も持っていないなくても平安な心を保つことができれば、その人は幸せです。これが福音のプレゼントではないかと思いました。

ミサ前に皆様に申し上げましたが、今日はある方が洗礼を受けられました。洗礼を授けるとき、二つのことを感じました。

一つは、私が病室に入ったときに、その方の奥様が、「神父様です」と紹介をしてくださいました。

寝たきりのその方は、目を閉じていたのですが、『神父』という言葉を知ると、目を開いて、ずっと待っていたかのように泣き出しました。自分の感情をコントロールできないように涙をこぼして私を迎えてくれました。そして、基本的な信仰や決心について私から伺ったとき、全てに「はい」と答えるその姿からも、「本当に強く願っているのだ」という感じを受けました。5～6人の方が周りで祈ってくださる恵まれた雰囲気の中で、洗礼を受けました。その時、『願う心というものも神様が許してくださらなかったらできないのではないか』と思いました。同じように、人間的な不幸に襲われたと思うとき、神様に傾く人もいますし、逆に、この世を呪って終わらせようとする人もいます。ではなぜその方に、洗礼を受けようとする信仰的な心ができたのでしょうか。簡単です。その方の家族の力です。奥様が願ったのでしょうか。祈ったのでしょうか。「神様、夫婦として今まで一緒に生きてきたこの人をどうか受け入れてください。」と強く願ったのでしょうか。そして、それがかなえられたのでしょうか。

皆様、祈れば、強く願えば、神様は絶対断れません。

二つ目です。自分のためではなく、他人のための祈りならば、神様は必ず聞いてくださいます。もし、その結果が自分の望んだとおりにとはならなかったとしても、“その人のために一番よい方向に神様が導いてくださった”という体験ができます。この教会の中にも、教会から遠ざかっている人が、結構います。それを自分の責任だと感じてください。もし全然変化がなかったら、自分の祈りが足りなかったと認めてください。そうではなかったら、「自分の家族」と言いながらも、他人として置き去りにしていることになります。

皆様、できるだけ後悔する人生を避けましょう。祈ってください。必ず聞いてくださいます。このような心で皆様が頑張れば、過日の復活祭の時に私が皆様にお願ひしたように、たくさんの人々が神様のみ前に来ます。この心で強く自分の使命感を感じましょう。

ありがとうございました。